

# かささぎ通信 第135号

毎月第2金曜日 13:30~15:30

2024年 4月 12日 発行

刈谷市中央図書館研修室 参加自由

森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

2024年3月の「森三郎の作品を読む会」では、

「鏡の渡」(『雪こんこんお寺の柿の木』1943年12月)と

「乳母」(『赤い鳥』1933年7月号所収作)を読みました。

「鏡の渡」は、若い渡し守の伊保奴萬(いほぬま)が、船に乗せた老人から渡し賃の代わりに受け取った古い鏡にまつわる話です。この話は一読しただけでは理解できませんでした。会の参加者一同、難解な筋立てを解き明かそうと試みました。話の中に「鏡」が何回か登場します。話の中に出てくる「鏡」に番号を付け、あらすじを確認しました。

夜、家に帰った伊保奴萬は老人から受け取った鏡(1)に顔を映しました。ところが、そこに映っていたのは美しい少女の姿だったので。少女は山の主の老人に無理やり連れて来られて身の回りの世話をしていると話します。でも山裾の川岸を越えた村にいる両親に逢いたくなり逃げようとしているのでした。伊保奴萬は少女を助けて山を下り船を漕いで向う岸に渡そうとします。少女は空を仰いで月に無事を祈ります。しかし川を渡り切る前に山の主に知られ、川は荒れ、不気味な風が吹き、船を進める事ができなくなります。少女はこの親切な渡し守を助けるために、小さな鏡(2)を渡し守・伊保奴萬の手に渡すと、自らは水の中へ飛び込みます。いつしか風は止み、波は治まったのです。

伊保奴萬はその後も渡し守として一人で暮らしました。例の鏡(3)をのぞくたびに、あの少女が優しく笑いかけるのでした。伊保奴萬は年を取り死の近いことを悟ると、月のいいある晩、船を川の中へ漕ぎ出し、鏡(4)を抱いたまま水の中へ身を投げ入れました。

ザブンという水音を聞いた途端、伊保奴萬は我に返りました。そして鏡(5)に映っているいつもの自分の顔に気づきます。その時、外で戸をたたく音がしました。外には月光を浴びて美しい女の人が立っていました。母親が病気になる夢を見たから自分の家に帰りたいなだったので、向う岸まで渡してほしいと頼むのです。伊保奴萬は鏡(6)

を懐にして家を出て女を船に乗せ、川の中ほどまで来た時、鏡(7)を取り出し、そっと水の上に落しました。鏡(8)は音もなく沈んでいきました。若い女は月を仰いで母親の無事を祈っていました。鏡に注目して読んでいくと、鏡が二つ出てくるのが分かります。

(1) 老人から渡し賃としてもらった鏡

(2) 〓 (1) の鏡の中に映った少女が伊保奴萬に渡した鏡

(3)、(4) の鏡は(2) の鏡であり、(1) の老人から受け取った鏡の中の世界の話です。(5) 〓 (8) の鏡は(1) の鏡そのものです。伊保奴萬は鏡の中の世界の体験によって、月のいい晩に女の人を乗せて川を渡ると身の危険があること、鏡を川の中に落すことによって荒ぶる川が治まることを知っていました。鏡の中の世界と同じように女の人が向う岸まで渡してほしいと頼んだ時、女の人を無事に向う岸まで渡すために鏡を水の中に沈め、難を逃れたのでしよう。最後に若い女が月を仰いで「お母さんをお守りください」と祈っている姿は、無事に川を渡ることが出来たことを示しています。

三郎さんの作品にはこの話と同様、一瞬の夢のような世界を入れ子型にしている作品が他にもありました。「夜長物語」(参照「かささぎ通信」88)、「虹の松原」(参照「かささぎ通信」15、74)等です。「虹の松原」は一人の少女を日本国中探し回る話でしたが、「虹の松原」という名は佐賀県唐津市の松浦川河口部付近に広がる松林として有名です。そのあたり松浦郡に「鏡の渡」という地名があったことが『肥前国風土記』にあります。地名の由来は「新羅討征に遣わされた大伴狭手彦がこの地で弟日姫子と結婚した。夫は別れる日、妻に鏡を渡したが、妻は悲しみ川を渡り見送った時、鏡の緒が切れて川に沈んだ」という内容です(日本古典文学大系『風土記』。三郎さんは伝説、民話、昔話などからヒントを得て多くの作品を作っていました。今回の「鏡の渡」もその一例と言えるでしょう。

〈次回予定〉 2024年5月10日(金) 午後一時半~三時半

・灯(『雪こんこんお寺の柿の木』1943.12)

・フィルム(『赤い鳥』1933.8)